

雪見の椿餅と投壺遊び

からり、と音を立てて書庫の戸が開けられる。と同時に、冷気から身を守る為にどうするか、机の前で丸まっている真の背中^{しん}に明るい声が掛けられた。

「お早う、真、居るかい？」

「お早う御座います、戦様^{せんや}。おや、今日はお早いですね？」

手にしていた木簡から視線を上げて振り返った真の吐く息が、白い霧となって空気の流れに乗って揺らぐ。うん、と頷きながら、戦は大きな身体を小さくして書庫の中にずりずりと這い進む。そんな戦が吐く息も、ふわりと白い。

「真、今朝は随分と寒い、と言うか、冷えたと思わないかい？」

「言われてみれば、そうですね。書庫の中に居ても、吐く息が白くなりましたからねえ」「そうだね」

はあ、と戦は冷え切った指先に息を吹き掛ける。書庫の中は外と変わらない位、寒い。真は蒐集癖があるのだが、書庫内は他者にはどうにも理解し難い内容の木簡だの竹簡だのが其処^{そこ}彼処^{そこ}で山となっている。真は此れ等を大事にするあまり、書庫内を徹底して火気厳禁としている。なので、暖を取る道具で持ち込めるものと言えば、どうぞ戦様、と真が

差し出している温石位なものだった。

しかし、瞳を綺羅綺羅させて真に擦り寄って来る戦は、まるで御主人様を見付けた仔犬が、短い四肢をばたばたさせながら駆けてくる姿に酷似している。

——これですよ。此の無邪^{むじゃ}気さが、いけないのですよねえ……。

下手をすると、義理妹^{いもうと}姫の薷^{しゅうひめ}姫様よりも、ある意味、底抜けな純粋さがあられますよね。

自分の味方になってくれると信じて疑っていない、戦の子供のような無垢^{むこ}さが真には眩しい。

有難う、と言いながら温石に手を伸ばした戦が、ずい、と身を乗り出した。

「それでね、これだけ冷え込むと、流石に明日か明後日位には、雪が降るかもしれない——と、真は思わないかい？」

「ですなえ、もしかしたら、有り得るかもしれないですね」

「だからね、真、その、祭国^{さいこく}……のように、とはいかないだろうけど……その、だね、ええと、あの、あれだ、つまり……」

「はいはい戦さま、椿姫様を慰めて差し上げる為に雪見の宴でも開きたいけど、どうだろうか、とまあ、そう言うお話をなさりたいのですよね？」

「凄いな、真。どうして分かったんだい？」

目を丸くして本気で不思議そうにしている戦に、そりゃあ分かりますよ、と眩きながら、真はとうとう笑い転げだした。

戦の義理の妹である薔姫が真の元に嫁いだ際に、祭国の王女である椿姫も介添娘として共に兵部尚書宅に入っている。彼女の容色は、白椿の精霊に喩えられる程、美しい。その麗しき姫君に一目惚れしている戦は、三日と開けずに真と薔姫の住まいとなった離れを訪れている。と言うよりも、義理妹の薔姫に託こつけて暇があれば入り浸っている、という方が正しい。そして、何かある毎に彼女にせつせと贈り物をしているのだ。だから戦が考えそうな事など、真はとくにお見通しだった。

真の眩きに気が付いていない戦は、うきうきしながら寄つて来る。まるで、何をしても楽しいばかりの仔犬が、ぶんぶんと尾っぽを振り回しているような感じがして、ぶつ、と真は噴き出してしまふ。

「真は、その、どう思う？ 我ながら、良い考えだ……と思うのだけどね」

「そうですねえ。椿姫様が祖国を離れられて数ヶ月経ちますし、此方での生活に慣れて来られた今時分が、一番、お気持ち沈まれてもおかしくないとか、ぼっかりと心に穴が空いたように感じて寂しく思われる頃でしょうから、何か楽しめる催し物を、というのは中々に良いお考えだとは思います」

真に賛同されて、だろう？ と戦は心底嬉しそうな笑顔となる。

「それじゃあ、早速、準備をしよう。真、手伝ってくれるかい？」

「それは構いませんが……ですが、戦様」

「うん？」

はあ、と真っ白い息を吐きながら、躊躇している真の前で、計画が上手くいくもの、と信じて疑っていない戦は何の曇りもない笑顔で首を傾げた。まるで、散歩に行こう、と誘う仔犬宛らに張り切っている戦に、真は申し訳無さそうに上目遣いをしながら首筋を掻いた。

「あのですね、戦様。戦様の計画には、一つ、重大な問題点があるのですが……」

「うん？ 問題点？」

「確かに、今は冬です。寒さはどんどん厳しくなっております。ですが……」

「うん」

「……戦様、まさか、その、本当に我が国の冬の特徴をお忘れ、なのですか？」

「うん？ 特徴？」

「ですから、我が国の気候では降雪自体が稀なので、近日中に雪が降る、と言う、確証はありません。と言うか、殆ど無いに等しいと思われるのですが……」

最も過ぎる指摘を受けた戦は、あつ！と短い叫び声を上げると、おやつを取り上げられ

て耳と尾っぱを垂らした犬のように、しょんぼりと肩を落とした。

「しゅん、と萎れた戦が余りにも情け無いというか哀れを誘うので、真は笑いを噛み殺しながら代替案を提示する。

「戦様。ですから雪見の宴、と断定せずに準備を進められれば宜しいのではないのでしょうか？」

「うん？ それは、どういう意味だい？」

「つまりですね、姫様たちも御一緒に参加できるような、何か面白い遊びの席も同時に設けて差し上げておいたら如何ですか？」

「遊び？ 例えば、どんな？」

「そうですね、投壺とうこなんて、どうでしょうか？」

「投壺？ ……そうか、投壺か。それなら蓄も、椿……姫も、楽しめるね、成程」

投壺は元々、新年を迎える祝いの席で行われていたものであり、本来はかなり厳密な規則がある。やがて難しい型や規定を無くして酒席での饗しものへと変化していき、今では宮中だけでなく庶民の酒宴の席でも行われる遊びの一つとなった。読んで字の如く、的となった壺に矢を投げ入れて、成功した数を競う単純な遊びだ。だが失敗すると、酒宴などでは罰杯を飲まされたり、女子供が主役としての場合は顔に花卉や色紙を面白可笑しくなるように張ったりする。

「よし、分かった。投壺遊びの席を設けよう。投壺は私が用意するよ。真、真は庭を借りられるように掛け合ってもらえるかな？」

喜びのままに飛び跳ねている犬と見紛う勢いで、戦は書庫を飛び出していく。

椿姫の喜ぶ顔を思い描いて夢中になっている戦の耳には、ちよつと待ってください、戦様!と叫ぶ真の声など、もう届いてはいなかった。



城に戻った戦は、そのまま真の父親である兵部尚書の優ゆの執務室へと向かった。

先導となる内官も伴わず部下も従えず、突然、姿を見せた戦に、優は慌てた様子で椅子から立ち上がった。片手間に昼食をとりながら、書簡に目を通していた最中だったからだ。優は無意識に手に茹で卵を握りながら、上座を譲る為に礼拝を捧げかけた。すると、ああ、いいよいよよ、と戦は鷹揚に笑ってみせる。

「して、皇子様。本日は如何なる御用向きで兵部にまで御足労頂けたのでしょうか」

「実はね、兵部尚書と、少し話がしたいというか、お願いがあつてね」

「それはつまり」

ぎろ、と優は視線を鋭くする。
 「馬鹿息子が何かしら仕出かしたのでどうにかせよ、と言う話でありますか？」
 一気に強面になり、背後に怒りの湯気を立たせる優に、いや、違うから、と戦の方が慌てる。

「そんな物騒な話ではなくてだね、兵部にある投壺の道具一式を借りたいと思ってね」
 「投壺ですと？ そんな物を何になされるのですか」

「投壺遊びをしたいからに、決まっているじゃないか」
 投壺を借りたいと言うのだから、投壺遊びをするのが目的であるのは当たり前だ、と言うよりもそれ以外の理由など有り得ないだろう。頓珍漢な問い掛けをした気恥ずかしさをごまかすように、ふむ、と首を捻りながら優は腕を組んだ。

確かに、兵部には投壺の用具一式は幾つも揃えてある。ちよっとした酒の座で余興として行い親睦を深められるように、という珍しい優の心遣いからだった。

「承知しました。では、用意させましょう」

優は握っていた茹で卵をごんごんと額に打ち付けて殻にひびを入れながら、誰かおらぬか！と部屋の奥に向かって声を掛けた。

投壺遊びの用具一式を馬の背に括り付けて、にこにこしながら城からとんぼかえりして

きた戦を前にした真は、頭を抱えた。

「戦様……その道具はもしかなくても、私の父から借りてきた品、ですよね？」

「うん、そうだよ。以前、兵部尚書が部下たちに競わせているのを見掛けた事があったからね。でも、良く分かったね、真」

「それは分かりますよ」

降ろされた用具から、ずしりと重い矢を引っ張り出した真は、深い溜息を吐いた。

兵部に置かれている投壺の矢は、流石に武辺一辺倒、武勇至上主義の優らしい代物だからだ。

通常、投壺遊びに用いられる矢は二尺八寸という決まりがあるのだが、優はこれを四尺にしており、直径は三寸、重さは三斤近くもある。これで楽しめる、と本気で思っている迷惑千万な優に何か一言物申そう、という男は残念ながら兵部には一人も居ないらしい。因みに余談ついでに付け加えるならば、優が主催する投壺である場合、投げ矢に失敗すると審査員となった彼の腕から飛ぶ鉄拳を喰らう、という罰がくだされる。だから皆、本気も本気、命懸けの試合宛らに、目の色を変えて挑む。

——遊びの席であっても、兎に角、身体を鍛える方向に走る父上も相当にどうかしていると思うのですが、それを微塵も不思議と思われていない戦様も、何と言うか大概と言うか、やっぱり天然、なのですよねえ……。

こんな所で頓珍漢ぶりというか、天然さを發揮されても困りますよ、とぼやきながら真は矢を戦に押し付ける。

「戦様、よおくお考えになられてください。良いですか？ この矢は長さが四尺程、重さが三斤近くもあるのですよ？ 姫様がたが、どうやってこんな重たい矢を放てるのですか？」

「……あっ……!?!」

「大体ですね、姫様は、この矢よりも背が低くていらっしやるのですよ？ 武辺者で知られる兵部の者でも扱いかねるような品を用意されて、どうやって遊べ、と言われるのですか？」

上機嫌だった戦の顔はせが、さあつ、と音を立てて血の氣を失くして真っ青になる。受け取った矢を手にして、おろおろし出した。

「し、真、ど、どうしようか」

はあ、と慥とらしく溜息を吐いてから、真は肩を軽く竦めてみせる。

「こんな事もあるうかと、姫様に頼んで城に遣いを出してあります。もう少ししたら、蓮才人様より女性用の投壺の用具が届けられると思いますから……」

「流石だね！ 有難う、真！」

言葉の途中で満面の笑顔となった戦に抱きつかれた真は、全く、仕方が無い御方ですね

え、と苦笑いするしかなかった。



その日の夕刻に、蓮才人から投壺が届けられた。

可愛らしく華やかな色合いに染められた羽が飾られた矢を見て、わあ、と蕃姫が歓声を上げる。投壺は、まだ城に居た頃にも楽しんだ遊びであるから蕃姫も楽しみを隠しきれない様子で、二日後に、と兄の戦に誘われた日までそわそわしっぱなしだった。

当日の天候は、真が予見した通りとなつてしまった。

翌日も翌々日も、ぐんと冷え込みはしたが、雪が降るまでには至らなかったのだ。一縷の望みを懸けていた雪見の方は、当然ながら諦めなければなくなり、戦は何度も何度も天を仰いでは恨めしそうに深い溜息を吐いた。ただ、蕃姫に釣られて珍しくはしゃいだ笑い声を立てている椿姫を見て、幾分、心が慰められたようだった。

「さて、では早速、勝負と参りましょうか。先ずは……そうですね、戦様と椿姫様、私と姫様、で組を作つて対戦、でよいですかね？」

「うん！」

「真はさり気なく、最初に戦と椿姫が寄り添えるように組分けをしたのだが、分かっているのかいなのか、椿姫は邪気のない笑顔で、はい、と明るく返事をする。裏表の無い椿姫の笑みを前にして、もう充分報われた、と満足してしまっている戦に、其処から先が肝心のじゃないですか、と真は呆れた。

しかし優が無駄に気を利かせて釣殿つとだまではなく、武芸の鍛錬用道場を使う許しを真に与えていたので、四人は気兼ね無く投壺遊びに興じる事が出来た。投壺には矢の投げ方に色々な作法があり、勝ち負けを定めるにも小難しい点数計算をしなければならないのであるが、まだ幼い蕃姫も一緒に楽しめるように、とそういった煩わしさを全て取り払い、ただ用意された十二本の矢が壺に多く入った方が勝ち、とした。

次第に勝負に真剣になっていく四人の間で、底抜けの笑顔と歓声が弾ける。

面白い事に、四人の中で一番苦手そうと言うか下手そうな真が、一番、勝負に強かった。蕃姫や椿姫でさえ、罰の花飾りを頬や額に貼られていると言うのに、真の顔には一枚もないのだ。

「意外だなあ、真、強いじゃないか」

「意外だな、は余計ですよ、戦様」

「いや、だって、一度も負けていないじゃないか」

頬や額に幾つもの花弁や蝶の飾り紙を張られた間抜けな顔で、戦は感心している。

大張り切りで挑んでいた割に、戦が四人の中で一番負け数が多かった。壺を通り越してしまったり、勢い余って壺を倒してしまったり、と力が有る分、逆に上手く行かないのだ。折角だから椿姫に良い所を見せようと思っていたのに、完全な勇み足となってしまうのだ。

今回の勝負では、蕃姫に負けてばかりいた。背の低い妹姫が紅い梅の花飾りを手にしながら、ぴよんぴよん跳ねて屈むように急かしている。

「御兄上様、ほらほら、早く屈んで！」

「待って、分かったから、蓄」

「御兄上様、早く、早くう！」

「分かった、分かった」

腰を屈めた戦の腕を仔猫がじゃれつくように捉えた蕃姫は、兄の鼻の頭の上に梅の花飾りをべたり、と貼り付けた。

「取っちゃ駄目よ？」

「分かっているよ。……でも、蓄、出来るなら、ちょっと、鼻の頭だけは、勘弁してくれないか……なあ？」

「だーめ！ だってもう、何処にも貼る所なんてないんだもん！ 仕方無いでしょう？」

「しかしね……」

「取らずにちゃんと、お城に帰って、御母上様に御報告申し上げなくちゃ駄目なんだから！ ね、分かった!?」

参ったな、と眩く戦を見て、益々薔姫は高い笑い声を上げる。そんな戦たち兄妹を見やりながら、くす、と椿姫が笑みを零した。

「そろそろ、少しお休みにして、おやつを頂きましょう」

何回も勝負を繰り返して疲れが出てきた所であったから、わあい！と薔姫が歓声を上げて賛成する。

椿姫が手際良く、持ってきた包みを開いて五段になった菓子器を広げた。

一段一段に、一人分の菓子が乗せられているのだが、戦も真も、此れは？と目を丸くする。菓子器の中央には柑子かんじと共に、見慣れない、つやつやとした椿の葉に上下を挟まれた団子状の餅菓子があつた。

「椿餅、と言うのです。蒸した餅粉を蜜や砂糖で練って丸めた餅を、椿の葉で挟んであります」

興味津々の戦と真に簡単に菓子の説明をすると、椿姫は、菓子器を手にしたまま、立ちん坊になっている薔姫の小さな背中を優しく押した。

「薔姫様、さあ、ほら」

「……う、ん……でも……」

「折角、頑張って作ったのでしょ？」

「……うん」

椿姫に促された薔姫は、頷きながらも、気恥ずかしそうに身体を縮こめている。暫くの間、もじもじしていた薔姫だったが、真の嬉しそうな期待を込めた視線を受けてやつと決心が付いたのか、菓子器を差し出した。しかし、先程までの快活さは何処へやら、おずおずとしおらしい。

「ええっと……あのね……これね……」

「私に、作ってくださったのですか？」

二―三拍の間の後、やつと薔姫は頷いた。頬や額に貼られた花飾りよりも顔を赤くした薔姫と、菓子器との間で何度も視線を行き来させた真だったが、目を細めて、くす……、と笑うと、小刻みに震えている小さな手から受け取った。そして、やおら椿の葉で挟まれた菓子を取り上げると、つるり、と小さな丸餅を口の中に放り込んだ。呆気に取られている薔姫の顔を、真は悪戯っぽく覗き込みながら、もぐもぐと頬を動かす。

「うん、美味しいです。これは美味しいお菓子ですね」

俯いていた薔姫は、顔を上げるなり、ばあ、と顔を輝かせた。

「ほ、ほんと？」

「ええ、とても美味しいですよ。有難う御座います——姫」

「……ど……どう、致しまして……えと……わ、我が、君……」
真に褒められて益々顔を赤くした蕃姫は、袖で顔を隠しつつ、うふっ、と小さく笑う。

そんな二人の様子を見ながら、良かった……、と零す椿姫の手から菓子器を受け取りつつ、おや、と戦は笑った。

——二人とも、今までと違うね。

「これまで自分が知る限り、真は蕃姫の事を『姫様』と呼んでいたはずだ。なのに今、真は妹を『姫』と呼んでいる。

蕃姫の方も、真に呼び掛ける際には『……あの』だとか『ええと……』だとかであったのに、『我が君』と呼んでいる。

椿姫も、二人の間にあつた溝のような蟠わたかまりが一つ埋まり、気持ちの距離が縮まったと感じているのだろう。うっすらと涙を浮かべながら、良かった……、と何度も零している。

麗しき自分が自分と同じ気持ちになってくれてるのが嬉しくなり、戦は明るい気持ちで丸餅を口の中に放り込んだ。甘く優しい蜜の香りと味が、一杯に広がる。

「うん、真じゃないけど、本当に美味しいね」

「……はい」

「……蕃姫、その……」

「……はい？」

「その、何時も、有難う」

「……え？」

「義理母はは上も姫に話していたと思うが、蕃は城に居た間、甘やかされた生活をしていたからね。まともな娘修業を積んで来なかつたから、教えるのは大変だろう？ 手を抜いたり、我儘を通してもらって当然、という態度を取ってはいないだろうか？」

「そんな事はありません」

椿姫は、珍しくむきになって戦に言い返した。

「蕃姫様は、とても真面目に学んでいらつしやいます。今日のお菓子も、真様の為に自分一人で作りたい、と仰られて、ずっと頑張っておられたのですよ？」

椿姫の頬は、ほんのりと桜色に上気している。少しだけ尖らせた唇の先が、小さな教え子を懸命に、そして真剣に庇っているのだと物語っていた。

「……そうか、うん、そうか。濟まないね、姫。私が悪かった」

素直に頭を下げる戦に、分かってくだされば、と椿姫は慌てて手を振った。困ったような笑みを浮かべる椿姫の前で、ではもう一つ、と戦は鮮やかな緑色の葉を持ち上げた。

「あの、皇子様……」

「ん？」

「今日は、本当に……有難う、御座いました」
 「うん、なんだそんな事は——えっ!? いや、うん、その、楽しんでもらえたのなら、良いんだよ、それで……」

大いに照れまくり、貼られた花飾りより真っ赤になった戦の眼の前で、ざっ、と冷たい突風が巻き起こった。

「うわっ?」

「きゃっ!」

思わず戦と椿姫が固く目を閉じて叫び声を上げると、二人の背後で蕃姫が手を叩きながら、わあっ!と歓声を上げた。

「見て! ほら見て、見て、我が君!」

「はい、見えますよ。綺麗ですねえ」

幼い妻に袖を引つ張られながら立ち上がった誠も、目を細めて笑っている。

きゃっ、きゃっ、とはしゃぐ蕃姫の声を耳にしながら、戦と椿姫はゆっくりと目蓋を開いた。飛び込んできた光景に、感嘆の声を漏らした。

強い風に乗って、高い崑山脈から流れて来たのだろうか。

真っ白い雪が、ちらり、ちらり、と冬の澄んだ空に舞っているではないか。

「綺麗だね、姫」

「……はい、皇子様……」

戦と椿姫も思わず身体を寄せ合いながら道場の端にまで進み、空を仰ぐ。

四人は時を忘れて、白い雪の舞に見惚れたのだった。



翌日も、戦は変わらず真を訪ねて書庫に現れた。やっぱり、大きな身体を小さくして書庫にごそごそと入り込む。

「お早う、真。折角だったけれど、雪は積もらなかったね」

「お早う御座います、戦様。ですね。まあ、仕方無いです」

真の傍にまでずり寄った戦は、机の横に用意された弁当箱を目敏く見付ける。蓋を開けると、大きな握飯が三つと茹で卵が二つ、入っていた。握飯は炒った胡麻を混ぜたもの、肉味噌が真の中に詰めてあり、甘く食欲をそそる味噌の香りが、ぶん、と鼻腔を擽る。

真、どうしたんだい、弁当なんか用意して、と言い掛けて、ふと、真が夢中になって覗いている巻物が気になった戦は、ひよい、と身体を上にもずらした。紙は高価なものである

から、基本的に真が買い求める書は木簡や竹簡になる。なのに態々、巻物を手に入れてい
る。と言う事は、真は父親である兵部尚書にも商人の時にも、相当に無理を言っ手に入
れた書であるに違いない。

——何が書いてあるのだろうか？

真の肩越しに、ちらりと見えたのは、美しい赤い花卉の花だった。

「新しい巻物だね？　花が描いてあるのか？　真、今度は何を調べようとしてるん
だい？」

戦の視線に気が付いた真は、ばたばたと慌てて巻物を元に戻す。そして態とらしく、ご
ほん、と咳を一つすると、じろ、と戦を睨んだ。

「勝手に覗かないでくださいよ。これは購入した品ではなくて、借り物なのですから」

「いや、だからって、別に隠す事はないじゃないか？」

「何だって、良いじゃないですか」

「そんな風に言われたら、逆に気になるなあ」

「良いですから、気にしないでください」

戦と真の間で、見せろ、見せない、教えろ、教えない、の押し問答が暫し続いた。

しかしし不意に、ぐうう、と互いの腹の虫が鳴いた。はた、と動きを止めると同時に視線
が合い、二人は堪らず揃って噴き出した。

「戦様、言い争いは此処までにして、少し早いですがお昼を頂きませんか？」
「良いのかい？」

どうぞ、と笑いながら真は弁当箱を引き寄せると、握飯と茹で卵を一つずつ、皿代わり
にした蓋に乗せて戦に差し出した。有難う、と受け取った戦は、早速、握飯を手にして齧
り付く。

「うん、美味しいな。蓄も料理が上手になってきたね」

「はい、何しろ、お師匠様が良い御方ですからね」

茹で卵を手にした真が答えると、うん、と戦は何の気も無しに頷いた。

「戦様……もしや、とは思うのですが」

「うん？」

「昨日の椿餅ですが、ちゃんと、椿姫様を褒めて差し上げましたか？」

「……えっ？」

きよとん、としている戦の前に、全くもう……、と真は深々と溜息を吐く。

戦様のお菓子は、椿姫様が腕によりをかけて戦様の為に作ってくださったのですよ——
と、言い掛けて真は止めた。どうせまた、何故!? どうして!? と怒涛の質問攻めに合うだけ
だ。

——それに幾ら天然な戦様でも、流石にこういう事が続けば、椿姫様のお気持ちに気付

かれるはず……でしょうしね。
押し黙った真の前に、握飯を片手にした戦が不満たらたらで眉を寄せながら唇を尖らせる。

「何だい、真、気になるなあ」

「ああもう、何も気になさらないで、どうぞ握飯をお食べください」

手にした茹で卵の殻を、ごんごんと額に打ち付けて割り出した真を見て、ぶっ、と戦が笑い出した。

終わり